

聖書日課

# みちのひかり

2025

10月

今月の聖句

「この川が流れる所では、  
すべてのものが生きる」  
エゼキエル書 第47章9節



八王子キリスト教会

## 10月1日(水) エゼキエル書 第29章

その日、私はイスラエルの家の一つの角を生やす。…こうして、彼らは私が主であることを知るようになる。(21)

本章は、エジプトへの裁きを語ります。栄華を極めたエジプトは「ナイル川は私のもの/私がこれを造った」(3,9)と錯覚しますが、主はファラオを「ナイル川に腹ばう大きな鱔」(3)と言われます。魚を自分のうろことして貼り付けて生きている鱔だと言われます(4)。錯覚を去った正しい認識は、ファラオが、実は神の創造の中にある被造物だということです。どんなに大きく豊かなエジプトも、神は力強い御手で、ナイル川から引き上げてしまわれます。バビロンとの戦いの後、辛うじて残るエジプトには、もはや世界に名を馳せるかつての隆盛はなくなります(13-16)。この移ろいを担うのがバビロンです(17-20)。その中で「イスラエルの家の一つの角」(21)と言われます。繁栄の回復の約束です。神が世界を導き造っておられる世界の真相を、主の民が示しています。

現代、地球を自分の所有だと思い込む錯覚は、なお強く存在します。地球に影響を及ぼすほどの力を獲得した人間に、持続可能性の問いが突きつけられています。本当は、地球もそこにある世界も、神からの貸与物です。神は御自身の世界を、必ず善いものとして取り戻されます。

主よ、傲慢な世界の中で、どうか、創造者を畏れ、あなたが今なお造っておられることを指し示していることができますように。

## 10月2日(木) エゼキエル書 第30章

他国の民の手によって、その地(エジプト)とそこにあるすべてのものを荒廃させる。主である私がこれを語った。(12)

「主の日は近い。それは暗雲の日、諸国民の裁きの時である」(3)と語られます。「主の日」を喜びの礼拝の日とする私たちからすれば、違和感があるでしょうか。しかし、悲惨を作り続ける人の支配が砕かれ、神が世界を回復なさる日です。「暗雲」(3)は、神の光を失っていることを明らかになさる神の裁きの象徴です。この世の光は真実には光たり得ません。そう考えると、今の主の日の祝いも重なります。世の闇に追い立てられるように、主の光のもとに駆け込み、国と力と栄えが限りなく神にあることを、改めて思い起こし祝う日です。

エジプトがバビロンによって裁かれていく様子が描かれています。この二つとも、主を知らぬ国です。主の裁きの手となるバビロンも、主の御心を行っている自覚などありません。しかし、それでも主の御心が行われています。神の御手が見えないような事情の中でも、御心は行われ続けているのです。このことは私たちを解き放ちます。神がただ独り隠れてお働きを進め給うのを知ったパウロは「誰が主の思いを知っていたであろうか。誰が主の助言者となっただろうか。…すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(ロマ11:34,36)と思わず声を上げました。

主よ、隠されたところでも働き続け給うあなたの御業を信じる信仰を与えてください。

## 10月3日(金) エゼキエル書 第31章

エデンの木々、レバノンのえり抜きの美しい木々、水に潤う木々はみな、地の底で慰められた。

(16)

エジプトの栄華が「この梢<sup>こずえ</sup>は、雲の中にあった」(3)と言われます。さらにこの様子が「梢を雲の中に伸ばし、高さのゆえに心が高慢になった」(10)と言われます。雲の中にまで伸びる梢とは、神のようになろうとする人間の姿を表しています。創世記で蛇は神の禁じた実を食べると「神のように」なれるとそそのかします(創3:5)。その誘惑を受けた人間は、さらにバベルの塔を築き「頂は天に届くようにして、名を上げよう」(創11:4)と言い始めます。同様の人間の姿が、エジプトに現れたのです。神ならざる人間が、力を誇り神の座に就くことほど危険なことはありません。知恵も慈しみも持ち合わせず、ただただ自分が神であることを楽しむような神になろうとするからこそ、神は「その梢を伸ばせず、また水に潤う木々が自らを頼んで高ぶることがない」(14) ようになさいます。

対照的に語られる人間の真相は、「これらすべては死に渡され、地の底、人の子らの間、穴に落ちていく者のところに行く」(14) というものです。この厳粛さは「諸国民を震えさせます」(16)が、しかし「慰め」でもあります。強い者も弱い者も、本当は変わりがないことを地の底で知るからです。力を去り、それを知る時に、神の慰めは明らかになります。

主よ、高低が取り去られた人生の底で慰めを得る、まことの慰めに向かわせてください。

## 10月4日(土) エゼキエル書 第32章

ファラオは彼らを見て／自分の全軍勢について  
慰められる。／ファラオとその全軍は剣で刺し  
貫かれた／——主なる神の仰せ。(31)

本章では繁栄を極めたエジプトが、本当は何であったのかということが、それまでに滅んだ多くの国や民の名前と共に語られます。16節で「これは哀歌」と言われ、それは諸国民の哀歌だと言われます。もちろん、エジプトのために嘆く哀歌であり、同時にそれを歌う自分にも通じる哀歌でもあるということです。威勢のいい歌も、必ず哀歌になる、という儂い人間の定めが言われます。

エジプトは、「自分が誰よりも愛らしい」(19)と、つまりこの国と国民は特別と考えたようですが、アッシリアも、エラム(ティグリス川東部のかつて栄えたアッシリアの同盟国)も、メシエクとトバル(小アジアのアッシリアの同盟国)も、エドムもシドンも、墓、陰府で、共に横たわると言います。歌われている主人公は変遷しつつも、威勢のいい歌から哀歌への変化は、全人類に共通する変化です。

「ファラオは彼らを見て、自分の全軍勢について慰められる」(31)については、《みんな滅びるのだ。自分ばかりではない》という慰めかもしれませんが、さらに言えば、必死に自分を特別視するよりも、人間は移ろうものと潔く理解することの方が、より慰めに近いということでもあるでしょう。

主よ、私の本当の姿を知っておられるあなたの慰めに、私をゆだねます。

## 10月5日(日) エゼキエル書 第33章

立ち帰れ、悪の道から立ち帰れ。イスラエルの家よ、あなたがたがどうして死んでよいだろうか。(11)

預言者の使命は警告で、「我々の背きと罪は我々の上であり、そのため我々は瘦せ衰える。どうして生きることができようか」(10)と、イスラエルは、本当はそうは生きられない、悲惨な生き方をしていることが告げられます。その警告を与え給う神の切々たる本心が「私は悪しき者の死を決して喜ばない。…あなたがたがどうして死んでよいだろうか」(11)と語られます。

「正しき者の正義も、背くときには自分を救うことができない。また、悪しき者の悪も、その悪から立ち帰るときには、それによってつまづくことはない」(12)は興味深いです。人が自分の悪に気づき神に向け立ち帰る時にはつまずきはありません。神へと帰る道を神が祝福なさるからです。しかし、神の言葉に耳を貸さずに、自分の思う正しさに固執する時、正しさはむしろ救いを遠ざけます。ルターは、「罪は、それが戦いの中であって、いまだ支配者ではない限りにおいて、聖徒のために役立つように定められている」と言いました。

エルサレム陥落の知らせが、エゼキエルの元に届き、逃れた者たちが彼のもとにやってくる前に、愛妻を失って以来閉じていた口が開き(22)、言葉を語ります。それでも人々が深い御心を聞き取るのは簡単ではありません(31,32)。

主よ、自分の正しさに固執するよりも、あなたの御心に心を開かせてください。

## 10月6日(月) エゼキエル書 第34章

あなたがたは私の群れ、私の牧草地の群れである。あなたがたは人間であり、私はあなたがたの神である。(31)

牧者である神と羊である人間について「あなたがたは人間であり、私はあなたがたの神である」(31)と言い極められます。神はあらゆる意味で人間に対する責任を取り続けておられることを語るもので、神と人間の関わりはこの《羊飼いと羊の関わり》以外にはありません。

牧者とは、民を治め、幸いへと導く使命を負う王や祭司や預言者などの指導者たちですが、彼らはその使命を忘れ、「わが身を養うイスラエルの牧者」(2)となり果てています。また「あなたがたは弱ったものを力づけず、…かえって力づくで厳しく支配した」(4)と、その支配のずさんさが言われます。政治も宗教も腐敗した時、「牧者がその群れを散らされたときに自分の群れを捜し出すように、私は自分の群れを捜し出す」(12)と神御自身が立ち上がられます。神がイスラエルの牧者だというのは、美しい比喩表現ではなく、現実なのです。「私は彼らの上に一人の牧者を立て、彼らを養わせる。それは、わが僕ダビデである」(23)と言われるのは、メシアのことで、この約束の通りまことの羊飼いである主イエスが与えられました。世界史を見れば組織としての教会は腐敗しますが、それでも、主はその民をなおお支えになり、今日なお真実な信仰を生きることが許されるのです。

主よ、真実な牧者が、世の腐敗に挫けずに導いておられることに目を開かせてください。

## 10月7日(火) エゼキエル書 第35章

セイルの山よ、全エドムよ、そのすべてが荒廃する。こうして、彼らは私が主であることを知るようになる。(15)

セイルは、死海南端からアカバ湾までの谷の東岸で、エサウの子孫のエドム人のことが言われています。エサウとヤコブ(イスラエル)の兄弟間に生じた複雑な関係は、歴史に尾を引きます。「あなたがいつまでも敵意を抱き、イスラエルの子らを、その災難の時に、また最後の刑罰の時に、剣に渡した」(5)とは、ユダへのバビロン侵攻時、それに協力することで、積年の恨みを晴らすところがあったからです。

そうしたあり方に対しては「私はあなたを必ず血に渡す。血はあなたを追い求める。確かに、あなたは流血によって罪を犯したので、血はあなたを追い求める」(6)と主は語られます。血を求める解決がさらに血が流れる結果に至るといふ、いわゆる“報復の連鎖”です。こうした負のエネルギーで築かれる国は、滅びへの傾きを抱え込んでいます。そこにある願望は、「これら二つの国民、二つの地は私のもの、我々がそれを所有する」(10)という度を越えた所有の思い(貪り)です。それが妬みを生み、敵の滅びへの嘲笑(12)となります。しかしそれでは、自分が滅びる時も嘲笑の的となるでしょう。溜飲を下げる一時の嘲笑は、結局何も造っていないことに気付かなければなりません。

主よ、恨みの熱から解放してください。恨みを知らなかったキリストに倣うため、御霊を与えてください。

## 10月8日(水) エゼキエル書 第36章

あなたがたに新しい心を与え、あなたがたの内に新しい霊を授ける。(26)

本章からイスラエルの回復が語られます。それはイスラエルに自身に拠る回復ではなく、神に拠る回復です。「イスラエルの家よ、私が行うのはあなたがたのためではなく、あなたがたが行った先の諸国民の中で汚した私の聖なる名のためである」(22)と、回復の主体は神だと言われているとおりで、「あなたがたのためではなく」は、寂しい感じもしますが、実はこれは恵みです。「自分を嫌悪」(31) することを、乗り越えさせる恵みの力です。

回復されるべき自分の価値を知らなければ、そもそも回復を願わないでしょう。あるいは、回復が自分にだけかかっているということになれば、自分で回復を諦めればもう何も残りません。だからこそ、回復させる主体が、誰が何と言っても、あなたを愛する神でなければなりません。「私<sup>が</sup>あなたがたの上に清い水を振りかけると、あなたがたは清められる。…あなたがたに新しい心を与え、あなたがたの内に新しい霊を授ける。…私の霊をあなたがたの内に授け…あなたがたは私の民となり、私はあなたがたの神となる」(26)と、神があなたの回復を強く願っておられるのです。それゆえに、どんなに自分を恥じて(32)、神の恵みが支えています。ここに恵みがあります。

主よ、ただあなたのために私を回復させてくださる恵みの強さを心から感謝いたします！

## 10月9日(木) エゼキエル書 第37章

主は私に言われた。「人の子よ、この骨は生き返ることができるか。」私は言った。「主なる神よ、あなたはご存じです。」(3)

前章で語られた神のための回復は、枯れた骨が生きるといふ、ダイナミックで人間の理解を超えた幻で語られます。「枯れ果てていた」(2)は、骨の側には一縷の望みもないということを表します。預言者は逆立ちしても、枯れた骨についての命の回復は語れません。「主なる神よ、あなたはご存じです」(3)と言うほかありません。突き詰めたところ、望みの根拠は私たちの側にはないと告げています。示される「霊を吹きこむ」(5)という幻は、創世記での土塊からの人間の創造を思い起こさせます。「我々の骨は枯れ、我々の望みはうせ、我々は滅びる」(11)と絶望する民を、なお回復の望みへと絡め取る神の霊の業を示す幻です。

しかしまた、それは回復であって、リセットではありません。主が導き続けてこられた世界も、イスラエルの歴史も、主は決して無かったものとして捨ててしまわれません。既に滅び去ったイスラエルとユダの統一について語られるのは、神が始められた《救い》は、神の業であるがゆえに貫徹するからです。神には、恵み深い逆回しが可能なのです。この神への集中は、終末における諸国民の《救い》まで見通させます。

主よ、世界の悲惨を知らされる私たちに霊を与え、あなたの救いを信じ続けさせてください。

## 10月10日(金) エゼキエル書 第38章

多くの国民の前で、私は自らが偉大であり聖なる者であることを示し、私を知らせる。(23)

これまで語られてきた周辺諸国の中でのイスラエルの苦悩が、その背後にあって世界を混乱へと陥れていた「マゴグの地のゴグ」(1)によるのだと語られます。マゴグもゴグも実際上の地名や人物と言うよりも、終末においてその正体が明らかになる存在で、それがバビロンを巡る世界の惨状にもうごめいていたと言われているのです。

バビロンによる破壊は、片方では主がそれを許されたとエゼキエルは語ってきました。それは神の御許に立ち帰ることがない不信仰とその残酷さを逆手に取るような使い方と言わざるを得ません。神御自身のエデンでの喜び豊かな支配とは全く異なります。ゴグは「私は無防備な集落の地に攻め上り、人々が安心して住んでいる平和な国に侵入しよう。彼らは皆、城壁もなく、かんぬきも門も設けずに住んでいる」(11)と語ります。「あなた(ゴグ)は、私が遠い昔にわが僕イスラエルの預言者たちを通して語った者…預言者たちは当時、長年にわたり、あなたを彼らに向かって来させると預言していた」(17)と言われるように、平和を願いつつも結局悲惨な戦争を繰り返してしまう背景には、歴史にうごめく力があるのです。終末において、主はそれに勝利なさいます(22,23)。

主よ、あなたこそ勝利者であられることを、御言葉によって明らかにし続けてください。

## 10月11日(土) エゼキエル書 第39章

彼らが自分の土地に安らかに住み、脅かす者がいなくなるとき、自分の恥辱と私に対して犯したすべての背信の罪を負う。(26)

前章からの続きで、ゴグに対する主の裁きが語られます。ゴグの勢力の大きさが、彼らの武器を焼くのに七年間(9)かかるという言い方で表されています。さらに、彼らの墓地は、旅人を遮るほど広くなると言われます。墓地は不浄とされたので、人が通れなくなることを言います。その葬りだけで7か月(13)かかると言われています。

その大きな勢力に主が勝利を取られると、21節以降で言われています。「諸国民は、イスラエルの家はその過ちのゆえに捕囚となり、私に対して背信の罪を犯したために、私が彼らから顔を隠したことを知るようになる」(23)と言われるとおり、全能者の圧倒的な勝利によって、イスラエルも諸国民もようやく、彼らが誰に逆らい、何ゆえに激しい悲慘がもたらされていたかを知るようになります。

そうして「彼らが自分の土地に安らかに住み、脅かす者がいなくなるとき、自分の恥辱と私に対して犯したすべての背信の罪を負う」(26)とは真実に悔い改めるという意味です。確かに、人は厳しい裁きそれ自身の中よりも、神の慈しみの中で深く呼吸するときに、自分の心に真実に向き合うことができます。

主よ、悪への勝利と私たちへの慈しみを携えて、私たちに向かい合ってくださいる恵みを感謝いたします。

## 10月12日(日) エゼキエル書 第40章

我々が捕囚となって二十五年目、その年の初めの月の十日、都が破壊されてから十四年目、まさにその日に、主の手が私に臨み…(1)

エゼキエルは、幻のうちに青銅のような姿の人に伴われ、エルサレムの神殿を見せられます。この時は、エゼキエルの捕囚から 25 年目、エルサレムの陥落を聞かされてから 14 年目と言われています。エルサレムの陥落が 586 年 BC なので、この時は 572 年 BC ということになるでしょう。ペルシャ王キュロスの布告によってエルサレムの帰還が始まるのが 538 年 BC ですから、この時点で捕囚はこの先 35 年以上も続きます。捕囚の期間は 70 年ですから、まだまだ半分が残っていることとなります。厳しい現状から、もうこの先何も起こらないと望みを失ったのでしょうか。神殿がこの世界から消えてしまい、捕囚の地バビロンも滅びる様子もない。だからこそこの幻なのでしょう。

神殿の寸法が細かく書かれます。ソロモンの神殿に比べて、神殿の庭がそれよりも広いと指摘する人もいます。「一トファ(7.4 cm)を加えた長さ」(5)は、より大きなバビロンの物差しだという人もいます。捕囚を通りつつ、神の救いの構想は潰え去るところか、実は拡大していると示します。祭司が「ツアドクの子孫」(46)であるとはソロモンの神殿奉獻時の祭司を指し、純粋な祭儀の実施を表しています。神殿も祭儀も、神によって回復されると言われています。

主よ、神の救いが忘却も縮小もされないことを信じていられるようにみ言葉をください。

## 10月13日(月) エゼキエル書 第41章

彼は私に「これが至聖所である」と言った。(4)

前章に続いて、この章では神殿の本殿に関して記されています。その本殿の奥にまで連れて行かれ、「これが至聖所である」と告げられます。文章から形を読み取るのはなかなか骨が折れますが、門が 14 アンマ(40:48)、入り口が 10 アンマ(41:2)、さらに内部に向けて進み、至聖所の入り口は 6 アンマ(3)とされています。次第に狭くなっていくのです。「これが至聖所だ」と言われるだけで中には入らなかったのだ、という説明もあります。たしかに、至聖所は決められた日に、決められた祭司だけに入ることが許されていました。至聖所の入り口の狭さは、冒しがたい神の聖性のあらわれでしょう。人が立ち入ることが許されず、ただ神にだけ属する事柄があるのです。

人が立ち入ることができない狭きところで、神はその救いの最も大切な部分を進めなさいます。エゼキエルが直面している時代においてもそうです。捕囚の地で、手も足も出せない状態ですが、人が踏み込めないところで、神ただお一人がイスラエルの救いのために働き続けておられるのです。この聖なる神のお働きは、今の時代においても同じです。

主よ、私たちに触れることができないところで、最も大切なあなたの救いをお進めくださっていることを信じ感謝いたします。

## 10月14日(火) エゼキエル書 第42章

それは聖なるものと俗なるものとを区別するためであった。(20)

神殿の幻が続きます。前章とはまた異なる別の建物の記述で、それは祭司の部屋です(40:44-46の祭司の部屋とは別)。「主に近づく祭司たち」(13)は、ツアドクの子孫のことでしょう。ツアドクは、レビ人の中でもソロモンの神殿奉獻時の最初の祭司ですから(王上 2:35)、神殿が異教に染まる以前の神殿の純粋な時期への立ち帰りを言うのでしょ

うでしょう。「祭司たちが聖所に入ったなら、そこからそのまま外庭に出てはならない。彼らは務めを行うときに着る衣服をそこに置かなければならない。それは聖なるものだからである」(14)とされています。もちろん、神の聖性は強く、人間が冒したからといって失われるものではありませんが、問題は人間が世に染められて純粋な信仰を失ってしまうことです。バビロンが神を踏みこむことはできませんが、バビロンにいるユダヤ人たちが、その街の風で衣が不信仰に染められることはあり得ます。心してひとすじの信仰を保たねばなりません。

本章の最後には、神殿の周囲の壁について「それは聖なるものと俗なるものとを区別するためであった」と言われます。世界のすべては神のものですが、そのことがよくわかるのは神の御心を知ることが許される聖なる場所なのです。

主よ、ひとすじの信仰を保つことができるように、私をお守りください

## 10月15日(水) エゼキエル書 第43章

人の子よ、ここは私の玉座の場所、私の足の裏を置く場所である。ここで私は、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。(7)

語られていた神殿の幻が、そこに主の栄光が帰還することを語りつつ、クライマックスに達します。あの 10 章において去った主の栄光が今や帰ってくる、その幻を見るのです。

「人の子よ、ここは私の玉座の場所、私の足の裏を置く場所である。ここで私は、イスラエルの子らの間にとこしえに住む」(7) と、御使いによって神殿がエルサレムに置かれる意義が、主の玉座、足の裏を置く場所であると告げられます。もちろん、神は「私たちは神の中に生き、動き、存在している」(使 17:28)と言われるとおり世界にあまねくおられますが、それが神話ではなく現実となる時に、ある民を選ばれます。しかし、その選びの理由は「むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった」(申 7:7)と言われます。イスラエルの強大さではなく、弱小の民が滅びないことで、神話ではなくこの世界の現実に神が足場を据えてくださっていることがわかります。軍事に支えられず、ただ神に支えられる、それが真のイスラエルの姿です。

神殿の設計は神の掟の通りと言われます。自分の発想で救いを建てあげることにはできません。同様に、イスラエルを抜きにした救いを別に考えることも許されません。実際、主イエスもユダヤ人としてお生まれになりました。

主よ、今日生きるこの世界が、神の足の裏が確かに置かれている場所であると信じます。

## 10月16日(木) エゼキエル書 第44章

祭司は私の民に、聖と俗の区別を教え、汚れたものと清いものとの区別を知らせなければならない。(23)

神が入られた東の門は閉じられますが、祭司はそこを出入りし指導者の務めをせよと言われます。超越した聖なる神を民に示すためには、仲保者が必要で、それを祭司が担います。

しかし、ここには危険があります。その権威ある務めを担うべき祭司から、イスラエルの綻びは広がった経過があるからです。そのために、ここでは「イスラエルが迷ったときに私から離れ、偶像に従ったレビ人は…イスラエルの家にとって罪のつまずきとなった」(10,12)と言われます。これはイスラエルの神殿の腐敗を「レビ人である…アロン」(出 4:14)による“金の子牛事件”(出 32 章)のつながりで見ているのでしょうか。レビ人の中でも、エルサレム神殿の初代の祭司ツァドクの子孫にその務めがゆだねられます。そして、42 章と同様に神殿での奉仕で身に着ける亜麻布の衣服のまま外に出るのは「聖なるものを民に移さないため」(19)に、禁止されます。神のものを神のものとして保つ使命を、彼らが担うのです。大国バビロンの世俗が、神殿に入ってこないようにすることは、真剣な課題でした。竹森満佐一牧師は「礼拝を護る」と表現し、神のものとして礼拝を保つことを教えました。それは、神の言葉が人の言葉にすり替わらないようにすることによります。

主よ、世に生きつつ世に染まらないために、みずみずしいあなたの言葉をいつもください。

## 10月17日(金) エゼキエル書 第45章

イスラエルの指導者たちよ、もう十分だ。暴虐と抑圧をやめよ。公正と正義を行え。私の民から強奪をするな。(9)

神からの幻によって、帰還先のユダでの土地の分配が告げられます。まず触れられるのが、聖なる部分を献納地として主に献げることです(1)。1~3 節にかけてその土地の面積が言われます(12 km× 5 kmほど)。これがはじめに語られるのは、イスラエルに与えられた土地は、神によって与えられたものであることを改めて示して覚えさせるためです。

同時に、「公正と正義を行え」(9)と、指導者たちが職権を乱用し、分を超えてはならないと言われます。神の権威を代表する指導者たちが、暴虐と抑圧を行ったことが、この国が滅んだ原因です。具体的には正しい測りの使用が言われます(10)。これは、自分の利益に傾く測り方をしないことです。

献納地や指導者の公正な権威行使などは、今の時代においても大切な問題です。例えば、献納地は、あわよくば全部を自分のものにしてしまう損得勘定至上主義への戒めで、力や富もすべては神のものだと覚えるためです。また、正しい天秤や升は、強者と弱者で対応や態度を変えないということです。こうしたことが、失われれば社会は崩れるというのは、今もって変わらない厳粛な真理です。

主よ、私が出会う事々において、まず神の国と神の義を求めます(マタ 6:33)。

## 10月18日(土) エゼキエル書 第46章

内庭の東向きの門は…安息日には…開かれ、新月の日にも開かれなければならない。(1)

幻に示される神殿を巡って、様々な規定が記されています。いくつかを拾い上げたいと思います。

「内庭の東向きの門は、仕事をする六日間は、閉じておかなければならない。しかし安息日にはそれは開かれ、新月の日にも開かれなければならない」(1)。この東向きの門は神の栄光がそこからやってきた門です(43:1)。六日間働く仕事のために通る門とは異なる安息日にこそ開く門です。この安息日の門が、失われたことが、エルサレムの滅びにつながりました。すでにエゼキエルはこう預言していました、「私はまた、彼らに私の安息日を与え、私と彼らとの間のしるしとした。…しかし、イスラエルの家は荒れ野で私に逆らい、私の掟に従って歩まず、人がそれを守れば生きることのできる私の法を退け、私の安息日を甚だしく汚した」(20:12,13)。仕事とは別の門、安息日に開く礼拝(3)の門を持つことは、真の幸いへの入り口です。

礼拝のための献げ物について「小羊については、彼が手に入れることができるものでよい」(7)「彼がささげられるだけのものでよい」(11)とされています。神は心をお求めですから、礼拝を願うひとすじの心を神は喜んでお受けくださるのです。

主よ、この主の日、あなたの栄光がやってくる門を開き、ひとすじの心で礼拝を献げます。

## 10月19日(日) エゼキエル書 第47章

この川が流れる所では、すべてのものが生きるからである。(9)

神殿の幻がいよいよクライマックスに至ります。神殿は捕囚後に回復され再びエルサレムに建て直されるものばかりではありません。終末における神の神殿まで重ねて語られています。

神殿の敷居の東側から南に向けて、つまり死海に向けて流れ下ると言われているようです。アラバ(8)は死海を意味することがありますし、エン・ゲディもエン・エグライムも死海北岸の地名だからです。流れは合計4千アンマ(約2km)になり、泳がねばならないほどの流れになると言われています。したがって、比較的限られた範囲、すなわちエルサレムとイスラエルにやってくる命の流れということが言われているようです。さらに、13節以降の回復される土地の分割も、北の端がダマスコの北側のハマト、東のタマル(おそらくエリコ)、南はカデシュ(エジプト国境)、西はそこから海岸線をハマトまで北上となる領域です。約束の地として与えられた領域を大きく超えるものではありません。こうして、広さよりもエルサレムにやってくる命の確かさが語られているのでしょう。エルサレムをとおして与えられる救いにこそ、すべてを生きし癒す命があるのだと。

主よ、主はエルサレムで十字架にかかれ、そこで甦られました。この揺るぎなき命の流れにこそ、まなざしを定めます。

## 10月20日(月) エゼキエル書 第48章

その日からこの町は、「主がそこにおられる」と呼ばれる。(35)

エゼキエル書の最終章に、各部族に土地が配分されることが記され、中でもユダ族については8節以降に詳しく書かれます。「東端から西端までは、あなたがたが献げる献納地にしなければならない」(8)と言われ、さらに「その中央に聖所がある」(8)と言われます。この聖所はイスラエルが、神のものであることの証です。バビロンによる破壊と捕囚の悲しみの原因が、《自分たちが神のものである》を見失ったことだと受けとめています。そうすると回復は、改めてそれを見出すことです。同時にそれは、イエスラエルのみならず、世界の悲惨の原因と回復の道筋でもあります。

30節からの最後の段落は、都には四方に三つずつ、合計12の門が設けられると告げられます。描かれてきたのが、終末における神の都と重なる幻でしたから、四方に設けられた門は、そこから世界に向かって出て行くことで往来が生まれることを意味します。「主がそこにおられる」(35)という名前と呼ばれる都は、地理的なエルサレムの誇りにとどまりません。実際、このエルサレムから世界へと宣教が開始され、世界の各地で人々にも「主がそこにおられる」(35)という福音の喜びを聞き取っています。

主よ、救いがイスラエルをとおして、今日私にまでやってきていることを感謝いたします。

## 10月21日(火) ダニエル書 第1章

神は宦官の長の前で、ダニエルに慈しみと憐れみを与えた。(9)

ダニエルの生きた時代が、この第1章で大体わかります。彼は「ユダの王ヨヤキムの治世第三年(605年BC)」(1)にバビロンに連行された中から王に仕えるために選ばれた若者のうちの一人です。そして本章最後に「ダニエルはキュロス王の治世第一年まで仕えた(21)と言われます。「仕えた」は直訳すると「いた」で、彼の活動はさらに「ペルシアの王キュロスの治世第三年(536年BC)」(10:1)まで見いだせます。その活動の期間は少なくとも69年間、連行時12歳だったとすれば、81歳までとなります。彼は捕囚を知り、クロス王によるバビロンの崩壊とユダヤ人の解放までを知ったこととなります。

捕囚から回復まで歴史の中での彼の使命は、主への信仰を守ることです。その卓抜した知恵のゆえに王の寵愛を受けますが、王からの食事には偶像に捧げられた肉が混ざるのでそれを避け、野菜だけを食べて健康を保ち、彼らの管理者の宦官が王に責められることもなく守られた、と書かれます。壮大な歴史を導く神が、食生活と健康という日常生活までご配慮のうちに置いてくださっていることを知ります。神は、細やかな事々の積み重ねの中で大きな救いを動かしておられます。

主よ、今日の日常にあなたの救いの御手が及んでいると信じます。

## 10月22日(水) ダニエル書 第2章

この秘密が私に啓示されたのは、…知恵が私にあるためではありません…王様がご自分の心にある思いをお知りになるためです。(30)

夢を見たバビロンの王ネブカドネツアルが賢者に解き明かしを求め「もしお前たちが夢とその解釈を私に示さなければ、お前たちを八つ裂きにし、お前たちの家を瓦礫の山とする」(5)と言います。この厳しい求めに賢者たちは誰も答えられず、彼らに皆殺しの命令が出ます。ダニエルもその賢者のうちの一人でした。処刑のためにやってきた使いに対して、ダニエルは思慮深く「どうしてこのような厳しい命令が王様から出されたのですか」(15)と問います。残酷さで知られた王とは言え、あまりの無理な命令に、王の心の不安を読み取ったのでしょうか。たしかに「私の霊はかき乱されている」(3)と王は語っていました。ダニエルのやさしさは、彼が王に「この秘密が私に啓示されたのは…その解釈が王様に告げられることによって、王様がご自分の心にある思いをお知りになるため」(30)と告げる言葉にも表れます。ダニエルが異邦で隣人を愛する律法に生きていることは、異邦の残酷な王の心をも癒やしました。ちなみに夢は周辺諸国のことで、金の頭はバビロン、銀の胸はペルシャ、銅の腹はギリシャ、鉄のすねはローマ、陶土が混じった鉄の足はローマから分かれる国、切り出された石は、主の民の国と考えられます。

主よ、人も国も超えて通用するやさしさをもって人に向き合うことができますように。

## 10月23日(木) ダニエル書 第3章

四人目の者の姿は神の子のようだ。(25)

イスラエルの信仰が捕囚の地バビロンにおいて、神によって守られていることを本章は伝えています。バビロン王ネブカドネツアルは、前章で「まことに、お前たちの神こそ神々の神」(2:47)と信仰めいたことを語った、その舌の根も乾かぬうちに建立した金の像への礼拝を求めます。カルデア人たちが像を拝まぬ3人を訴え出ますが、それはダニエルへの王の寵愛に対する妬みによるのでしょうか。ダニエルを通しての御業が、かえってやっかいな問題につながったとも言えます。良いことや正しいことが問題を生んでいくという複雑な現実は、今も変わりません。

そのような問題の中に、もう1人の存在を見つけます。炉の中にいたもう1人です。ダニエル書はバビロンでの知恵者のダニエルらが抜かりなくやり抜く立身出世の物語ではなく、もう1人の方が導く物語なのです。複雑に幾重にも重なって生じてくる困難ですが、主の守りもまた、しなやかにそうした問題の一つひとつに寄り添うようにして解きつつ、ご自身の支配を明らかにし給うのです。人は「たとえそうでなくても」と結果を主にゆだねつつ、とにかく主を信ずるのです。ダニエルとその仲間の知恵とは、この方を畏れる知恵です。

主よ、見通せない問題にも生きてい給うあなたの導きが寄り添っていることを信じます。

## 10月24日(金) ダニエル書 第4章

人間のうちで最も低い者をその上に立てることを、生ける者たちが知るようになるためである。  
(14)

前章終わりからネブカドネツァルが見た大きな木の夢の話が始まり、人間の支配のきわどさが告げられます。この高く強く豊かな木は、周囲に憩いや宿り場を与えるので、必ずしも悪いものではありません。けれども、その大きさや強さが「高ぶって歩む」(34)ことにつながれば、その傲慢な支配は崩れ始めます。

「その心は人間の心から変えられ／獣の心が与えられる」(13)は、王がその座を追われて獣と共に住む「理性」(31, 33)を失った状態のことを言っています。しかし高ぶりと理性の喪失は、実はすでに王座にある時から始まっています。「獣の心」とは、人間が神から与えられた「最も低い者」(14)への憐れみを失った心です。どんなに豪華に生きているようでも、その心が獣になれば、すでに人間の中での居場所を失っているのです。

「人間のうちで最も低い者をその上に立てる」(14)とは、イスラエルに現された神の憐れみと慈しみに満ちた選びの表れです。国土すら失った弱く小さな流浪の民を、神がその憐れみと慈しみによって守ります。そのことを通して、歴史が神御自身の慈しみに満ちた力によって導かれていることが明らかにされています。神の慈しみを知ることで、人間らしさは回復されます。

主よ、獣の心を振り払い、憐れみの心をもって生きることができるよう。

## 10月25日(土) ダニエル書 第5章

あなたはこれらすべてを知っていながら、心を低くありませんでした。それどころか、天の主に対して高ぶり…(22,23)

ネブカドネツアルの子ベルシャツアルはエルサレム神殿からの戦利品の祭具を用いて宴を催します。浮かれ騒ぎの王宮の一室の白壁に、神は人の手を現し文字を書かせられます。誰も読めなかった字をダニエルが解説し、「神が…王国を数えそれを終わらせた…天秤にかけられ不足と判明した…王国は分割されメディアとペルシアに渡された」(26-28)とその意味を告げます。

ネブカドネツアルとベルシャツアルの2人の王は、高慢な振る舞い(20)という点では同じですが、人生のつまずきの中で自分とは別の真の支配者がおられることを知るか否かにおいては異なります(21)。しかもベルシャツアルは、「これらすべてを知っていながら、心を低くありませんでした」(22)と言われるように、神が支配者だと知りつつも天の主に対抗しようと高ぶったのです(23)。神が支配者であるということを見くびったのです。

こう捉え直してみると、私たちの不信仰も同じかもしれません。急所は、“思い通り”という自分軸がゆがんでも、そこにより強く確かな軸があることを信じるかどうかです。神は、たとえ思い通りでなくとも、自分の現実に神の御力を振るう信仰へと、私たちを招いておられます。

主よ、私の人生に及ぼす私の支配より、あなたの支配が強いことを信じさせてください。

## 10月26日(日) ダニエル書 第6章

このダニエルを訴えるには、彼の神の律法の中に口実を見つける以外に、どのような口実も見つかるまい。(6)

前章終わりで王国がメディアとペルシアに渡されると預言されたとおり、本章では場面をその地に移してのダニエルの物語となります。エルサレムを失ったイスラエルが、列強の趨勢の中で、なお神の守りの中にあることが示されます。ダニエルはダレイオス王のもとでも大臣に重用されます。それを周り的人々が妬み失脚させようとしますが、欠点は見つかりません。訴える口実は彼の信仰しかありませんでした。つまり、イスラエルの律法はメディアとペルシアの法に照らしてもおかしなところはなかったということです。パウロも「すべて真実なこと…尊い…正しい…清い…愛すべき…評判のよいことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい」(フィリ 4:8)と言います。律法はこの世の徳から逸脱する特異な教えではありません。したがって、世が神の民の信仰を迫害する時は、その民の素行の悪さではなく、神を畏れる信仰そのものです。

注目すべきは、その策略を知ったダニエルは、「以前からしていたように、その日も」(11)静かに「自分の神」に「自分の家」で、ライオンの口をも含む万事が、神の守りの中にあることを感謝し祈るのです。この静かに神のみを畏れる信仰が彼の強さだったのでしょう。

主よ、あなたを恐れ信頼する歩みを私の日常の確かな歩みとしてください。

## 10月27日(月) ダニエル書 第7章

この方に支配権、榮譽、王権が与えられ  
諸民族、諸国民、諸言語の者たちすべては  
この方に仕える。(14)

ダニエルは四つの獣の夢を見ます。第一の獅子のような獣はバビロンを、第二の熊のような獣はメディア・ペルシャを、第三の豹のような獣はギリシアを、そして第四の恐ろしい不気味で異常に強い獣は、ローマを表していると考えられます。このようにして語られているのは、目の前の強大なバビロンもさらに続いて現れてくる強国も、その時代には揺るぎなく見えても、必ず過ぎ去るということです。雲に乗ってやってくる人の子のような者こそが、諸民族、諸国民、諸言語の者たちすべてに対して永遠の支配を確立します。これはやがて与えられるメシアのイエスのことで、主もご自分を「人の子」と呼ばれました。

ダニエルは第四の獣に思いを悩ませ、傍らに立つ者にたずねます。おそらくは御使いであろう彼から、再び「王国と支配権、天の下の国々の權威はいと高き方の聖なる民に与えられる」(27)と告げられます。ダニエルでさえ、時代を支配する第四の帝国の出現を恐れますが、しかし天からの言葉は《支配は神とその民に》という福音を告げます。これがローマ帝国の迫害下のキリスト者たちをどんなに慰めたことでしょうか。そして時代は真にそのとおりに、神の支配のもとに進みました。

主よ、大国の様相に思いを悩ます私たちに、どうか天からの言葉を与え続けてください。

## 10月28日(火) ダニエル書 第8章

彼に語りかけられたとき、私は気を失って地にうつ伏せに倒れた。しかし、彼は私に触れ、その場に立たせた。(18)

ダニエルが見た雄羊と雄山羊の幻について、ガブリエルがその意味を説明します。雄羊はメディアとペルシアの王を表していて、それを打ちのめす雄山羊はギリシアの王を表しています。そのギリシアの王は高ぶりの極みで倒され、四つの王国が起こると言われます。そして、彼らの治世の終わりに「厚顔で謀を巡らす王」(23)が出現すると言われます。ダニエルが見た幻の中でこの王は、天の軍勢にまで力を及ぼす(11)と言われますから、宗教的な支配力を得るといふことでしょう。この王は、紀元前2世紀のシリア王アンテオコス四世エピファネスだと考えられます。彼が実権を得てエルサレムに圧力をかけ、破壊と殺戮を行います。また、主なる神への信仰を禁止し、神殿にゼウス神をまつり冒瀆します。その様子は、外典(旧約続編)の第一マカバイ記に詳しく描かれます。

ダニエルは、その殺戮、破壊、<sup>とくしん</sup>瀆神を先立って見せられ、また御使いの呼びかけに驚き気を失います。預言者ダニエルであっても神の救いとそこに至るまでの悲劇のあまりの振れ幅に「驚くばかりで、理解できずにいた」(27)のです。それをガブリエルが支えます。目の前の現実に耐え、神の計画に望みを置くためには、日ごとの神の支えが必要なのです。

主よ、目の前の出来事にも希望を失わないために、あなたの支えを今日与えてください。

## 10月29日(水) ダニエル書 第9章

私たちが正しいからではなく、あなたの深い憐れみのゆえに、私たちはあなたの前に嘆願を献げるのです。(18)

この章に記されるダニエルの祈りについて、ある学者は旧約聖書でも最も思慮深く、力ある祈りの一つと言っています。その祈りはエレミヤの「エルサレムの荒廃が終わる年数は七十年」(2)という預言に接することによって生み出されます。ダニエルは、単に終わりがやってくることを喜ぶのではなく、ここから彼の罪の悔い改めが深く深く始まります。すなわち、彼は民の背信によって荒廃がやって来たことを見抜くのです。ここにダニエルの知恵があります。本当の賢さとは神を知る賢さであって、愚かさは神を忘れることです。「主よ、恥辱に直面しているのは、あなたに罪を犯した私たちであり、私たちの王、高官、先祖たちです」(8)と、その愚かさに気付いた彼は、神に執りなして祈ります。その祈りを支えるのは「神に逆らったにもかかわらず、憐れみと赦しは私たちの神、主にあります」(9)と、神の恵み深さを信じ抜く心です。

さらに「主よ、あなたのすべての正義の御業によって、あなたの都、あなたの聖なる山エルサレムから、どうかあなたの怒りと憤りを去らせてください。」(16)と、救いは人にではなく神にあることを正しく見抜き祈ります。

主よ、あなたの恵み深さを信じる信仰に基づき力ある祈りを捧げさせてください。

## 10月30日(木) ダニエル書 第10章

恐れるな、愛される者よ。あなたは安らいで、強くあれ。強くあれ。(19)

「亜麻布を着た一人の人」(5)の現れに、一緒にいた人々が逃げ出します。この「一人の人」は、その場に残ったダニエルに「恐れるな」(12,19)と言います。彼もまた恐れていたのです。神の圧倒的な力が滅びに向くか救いに向くかで、事は決するから、神を恐れるのです。そのダニエルに対して繰り返し「愛される者」(11,19)と言われます。神への恐れと神の愛とが結び付く時、人は本当に恐れから解放されます。万事がもっぱら救いとして働くことを知るからです。

ダニエルはかつて最初の日「心を定めて悟ろう」(12)としていましたが、今また再び恐れています。つまり、ダニエルが悟りを開いてずっと泰然自若としていたわけではなく、ある瞬間に心を定めたのです。この心を定めたある瞬間を神が大切に受けとめ、「愛される者よ、あなたは安らいで、強くあれ、強くあれ」(19)と平安へと導いてくださいます。神の真実のゆえに、今やもう、神の言葉が聞こえなくなること、語れなくなることなくなりました。愛の神が聞かせたいと願っておられ、様々なことを通して、神がその言葉を届けてくださるからです。

主よ、安らいで強くあることは、あなたからやって来るとは、何という幸いでしょう。

## 10月31日(金) ダニエル書 第11章

大いなる権力によって支配し、思うままに振る舞う…その王国は砕かれて、天の四方に分割される。(3, 4)

ダニエルに告げられた、ギリシアの統治に対抗する王たちが別れ争う様子についての幻です。ギリシア王の「大いなる権力によって支配し、思うままに振る舞う」(3)傲慢な支配は分裂を生みます。「その王が立った途端、その王国は砕かれて、天の四方に分割される」(4)と言われるとおりです。利己的な支配が来たらせるこうした分断は、いつの時代にも、そして今なお繰り返されます。まことの王、イエス・キリストによって立てられる神の国(支配)はそれとは逆で、真の支配の力は他者の益のために用いられます。これを他にしてこの地での支配の確立はありません。

人間のわがままな支配は、王の「聖所と砦を汚し、日ごとの献げ物を廃止し、荒廃をもたらし憎むべきものを据える」という支配となります(31)。これは紀元前169年のアンティオコス4世によるエルサレム神殿での破壊と<sup>とくしん</sup>流神だと考えられています。「この王は思うままに振る舞い、あらゆる神にまさって驕り高ぶり…すべてにまさって自分を偉大だと考える」(36, 37)と言われます。まことの神を崇めず、自分の偉大さにばかりこだわれば、荒廃と破壊にたどり着くほかありません。

主よ、自分の知恵と力を振り回す醜く小さな王となることから私を救ってください。御名が崇められ、御国が来ますように。

---

聖書日課「みちのひかり」10月号 2025

© 高橋 誠